

ふたつの残念な話

上水敬由

ここに掲げる話はふたつとも、どちらかといえばクラシックなSFっぽいスタイルをとっているが、筆者にその方面の潤沢な知識があるわけではないので、いつか誰かが書いた作品に似たようなものがあつたとしても、まあ大目に見てやってほしい。

ついでに言っておけば、いろんな作品を読んで思想信条や宗教的な主張などを読み取ろうとするむきもおられるようだが、そんなものとは無縁の作品であると理解していただければありがたい。

筆者は自慢ではないが、それほど頭がよい人間ではないのだ。

「ようし、完成したぞ」

M博士は叫んだ。

「できましたね、博士」

助手のS君も叫んだ。

長年の苦勞が実つてタイムマシンがついに完成したのだ。あとは実際に乗ってみるだけだ。

「それで誰が操縦するのかね」

大統領の声が画面の奥から重々しく響いた。

なにしろ人類の歴史に残る国家的プロジェクトなので、これまでに費やした予算は大統領の再任を危うくするほどの額だつた。

大統領としては、自分の評判があまりかんばんばしくないことはわかつていたし、できればもう一期つとめたいと心から望んでいたのだ、このプロジェクトをなんとしても成功させたかつたのだ。

「私は見とどける必要がありますので、残念ながら乗ることはできません」

と、くやしそうにM博士は言った。本当はちよつと怖かつたのだ。

「私は研究室に待機してシステムをメンテナンスしなければなりませんので、残念ながら乗ることはできません」

と、恐縮してS君は言った。やっぱり本当はちよつと怖かつたのだ。

そこで、たまたま遊びに来ていた大学院生のT君が乗せられることになつた。

T君もできたら断りたかつたけれど、いつもどおりお金がなかつたので断りきれなかつたのだ。

「前金ですよ」

T君は大きな声で言った。

「エヘン、よしわかつた。おまけとして特別サービスを追加してあげよう。行き先と時代はT君が好きに決めるといい」

M博士はまだ考えていなかつたのを知られまいとして、恩着せがましく言った。

「いいなあ」

助手のS君は思わず言つてしまつてから、ケチなM博士に交代しろと言われるかもしれないことに気づいて、出かつたあとの言葉を咳払いでごまかした。

「まだ始めないのかね。私は忙しいのだ」

大統領の声がふたたび重々しく響いた。

本当は暇だつたのだが、大統領に暇なときがあるとは知られたくなかつたので、わざと怒つてみせたのだ。

「それではT君、さつさとしたまえ」

M博士はあわててT君に命じると、助手のS君と一緒に研究室の機器の前に陣取つた。

T君は操縦席に座ると、行き先を古代エジプトのピラミッド建設現場にした。

べつにどこでもよかつたのだが、研究室のカレンダーにピラミッドの写真があつて、きれいな女性が写つていたのをたまたま目にしたのだ。

「3、2、1、GO！」

T君の姿はあつという間に見えなくなつた。

見えなくなるのと同時に、T君の存在した痕跡はビッグバンにさかのぼつてすべてなくなつた。

このことを横で見ていた誰かもしもいたとしたら、さぞ驚いただろうが、もちろんそんな誰かはどこにもいなかった。

そこで、M博士は叫んだ。

「ようし、完成したぞ」

助手のS君も叫んだ。

「できましたね、博士」

長年の苦勞が実つてタイムマシンがついに完成したのだ。あとは実際に乗つてみるだけだ。

「それで誰が操縦するのかね」

大統領の声が画面の奥から重々しく響いた。なにしろ人類の歴史に残る国家的プロジェクトなので、これまでに費やした予算は大統領の再任を危うくするほどの額だったのだ。

大統領としては、自分の評判があまりかんばしくないことはわかっていたし、できればもう一期つとめたいと心から望んでいたのだ、このプロジェクトをなんとしても成功させたかったのだ。

「私は見とどける必要がありますので、残念ながら乗ることはできません」

と、くやしそうにM博士は言った。本当はちよつと怖かったのだ。

「私は研究室に待機してシステムをメンテナンスしなければなりませんので、残念ながら乗ることはできません」

と、恐縮してS君は言った。やっぱり本当はちよつと怖かったのだ。

そこで、たまたま遊びに来ていた大学院生のF君が乗せられそうになった。

しかしF君はバイト代が入ったばかりだったこともあって、キツパリと言った。

「いやです。僕は乗りません」

M博士たちがこのあとどうしたかについては、読者のご想像におまかせする。

メギドの丘

「これはたいへんだぞ。誰かに話さなくては」

K博士は叫んだ。永年にわたる研究の結果、人類の進化が去年で終わり、退化が恐ろしい勢いで開始したことに発見したのだ。

もちろん学術的にいえば、進化が終わったのは今日から二四八日と三時間一七分二九秒ほど前のことになるが、そんなことはどうでもよい。

「きつとんでもないことが起こるに違いない」

そう思ったK博士は、あわてていたのでいきなり国王に電話をかけてしまった。

国王が子どものころに家庭教師をしていたことから、連絡先を思い出したのだ。

「わかったよ」

K博士は国王のむやみに明るい声を聞いたとたん、算数の問題が解けないときにいつもわかったふりをしていてことを思い出した。

「それはともかくとしてだね、来月の第七王子の結婚式についてなんだが」

そんなときに必ず話をそらそうとする癖もあった。

さて先ほどのT君はというと、時間や場所の指定があやふやでまったく自信がなかったにもかかわらず、どういうわけか運よくピラミッドの建設現場に到着することができたのだ。

そして到着すると同時に、T君の存在はビッグバンにさかのぼってすべて裏打ちされてしまった。

つまりT君の祖先や家族や友人や生まれた村や、K君につながるいつさいの物事が、ごく自然な形でもとからあるものとしてそこに生じたのだ。

た、ちよつと残念なことに、T君の記憶も名前も外見も性別さえも、以前の姿をひとつも残していなかったため、誰かがT君の旅を証明しようと思っても不可能ということになった。

もちろん、そんな誰かはどこにもいなかったのだ。

すこし暗い気持ちになったK博士は口の中でムニャムニャ言うたびに電話を切った。

それからK博士は気を取りなおして首相に電話することにした。

首相が受験生だったころに通っていた学習塾の講師をしていたこともあって、いまでもときどき政策の相談相手になっていたののだ。

「なるほど」

首相は重々しくよく響く声で応えた。K博士はまたいやな予感がした。たしか物理が苦手だ。

「それはともかくとしてだね、現在審議中の法案が三五本もあって来年には選挙も控えているんだよ」

いまは忙しいので次の機会にでもくわしい話を聞くと行って、首相はあわただしく電話を切った。

しばらくポーゼンとしていたK博士はまたまた気を取りなおすと、これからはいつさい期待しないで、思いつく限りの相手に電話をかけることにした。

そのときK博士がかけた相手の中には、あるパーティーでK博士が食べようと思っていたチーズを横取りした文部大臣や、助手として採用した美人の女の子を横取りして自分の秘書にした大学総長など、K博士の大嫌いな人物まで含まれていたのだ、いかにK博士の危機感が大ききものだったかわかるだろう。

それにしてもよく横取りされるK博士ではあるが、もちろん横取りされたというのはK博士の勝手な思い込みにすぎないかもしれない。

ともあれ数時間にわたって電話をかけた結果、重要な話をちゃんと受けとめる人物がどこにもいないということがわかったので、ヒトのよいK博士の胸にも思わず知らず怒りがこみ上げてきた。

そこに学生のY君がやってきた。

Y君は以前からK博士が目をかけて助手代わりに使ってきたのだ。

「そうですか」

K博士からやつあたり気味の愚痴を聞かされたY君は、すこし冷たい声で応えた。

「そんなことより紹介してもらえないはずの就職先はどうなっているんですか？ それにこないだのバイト代もまだな

んですが」
あわてたK博士は、バイト代は来週にはかならず払えるし、就職先はもうすぐ決まりそうなどと釈明して、どうも信用できないとブツブツ言っているY君をやつとのことを知り返した。

ほんとうは両方とも実現できるあてなどなかったが、厳格なK博士もときどきはいい加減なことを言うのだ。

なんだか疲れてしまったK博士が頬杖をついてボンヤリ

しているところに、電話がかかってきた。

「もしもし」

K博士の妻だった。

「帰りにお願ひしていた買物の件だけど、ジャガイモを三個追加してちょうだい」

K博士はもうどうでもよくなった。

こうしてK博士の大発見は誰にも理解されることなく歴史の彼方へ消えていったのだ。

それからどうなったかというところ、人類の退化はK博士の予測をはるかに超える速さで進み、人類がイタチほどの大きさの四足獣になるより先に、築き上げてきた文明は跡形もなく消えてなくなったのだ。

そのときにどこかでラッパが鳴り響いたとしても、誰もそれがラッパだということさえわからなかっただろう。

ともあれ人類の知性が消え去るまでの間に、地球規模の火山噴火や小惑星の衝突などがなかったのは、人類にとつてわずかな慰めだったと言えるかもしれない。